

ぐるりのこと。

2008(平成20)年4月9日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督・脚本・編集・原作＝橋口亮輔／出演＝木村多江／リリー・フランキー／倍賞美津子／寺島進／安藤玉恵／柄本明／寺田農／八嶋智人／木村祐一／斎藤洋介／温水洋一／峯村リエ (ビタース・エンド配給／2008年日本映画／140分)

……監督自ら原作・脚本を書いたオリジナルな企画は、原作本頼りの今の邦画界では貴重！ また、木村多江とリリー・フランキーの共演は異色！「世界が認めた才能」橋口亮輔監督は、90年代の激動の中、ある悲しみから心を病んだヒロインへ温かい視線を。その再生を支える頼りなさそうな男も人間味がいっぱい。タイトルの意味を味わいながら、しっとりと味わいたい秀作の登場だ！

はじめて橋口亮輔作品を！

橋口亮輔監督の2作目『渚のシンドバッド』(95年)はロッテルダム国際映画祭グランプリ等を受賞し、3作目の『ハッシュ！』(02年)は第54回カンヌ国際映画祭監督週間部門に正式招待されたほか国内外で大絶賛され、世界52カ国以上で上映された作品。このように、彼の才能は世界的に認められたもの。しかし残念ながら、私はまだ1本も観ていなかった。

今回私がはじめて観た橋口作品『ぐるりのこと。』は6年ぶりの新作だが、監督の他原作・脚本・編集を兼ねたこの映画は、『ハッシュ！』の公開後彼自身がうつ状態になり、死ぬことばかり考えていたという自分の体験を踏まえて実現したとのこと。さて、この映画では誰が、なぜ、どんなうつ状態に……？そして、その克服と再生は……？

また、そもそもタイトルの『ぐるりのこと。』とは一体ナニ……？言葉どおりに考えれば、それは「自分の身の回りのこと」だが、果たしてそういう解釈でいいの……？

リリー・フランキーがいい味を！

リリー・フランキーは、『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（07年）の原作者としてその名前は知っていたが、俳優として主演するのはこれがはじめてのこと（ちなみに、『歓喜の歌』（07年）に出演していたらしい）。何となく『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』に主演したオダギリジョーと雰囲気が似ている感じだが、オダギリジョーが演技派であるのに対し、リリー・フランキーは自然派……？

妻の翔子（木村多江）は現在妊娠中ながら、出版社でバリバリ働いている元気な女性。しかし、靴の修理屋として働いている夫の佐藤カナオ（リリー・フランキー）はどこか頼りなさそう。そのうえ、女とみれば誰かれとなく声をかけるような、女にだらしない男。

ところで、夫婦の部屋に掛けられているカレンダーには、週3回「×印」がつけられているが、これは一体何の印……？ 映画の冒頭にこの印をめぐって展開される、きっとA型だと思われるしっかり者の翔子と、B型かO型だと推定されるカナオとの間の夫婦生活（セックス）議論は、まさに自然派俳優リリー・フランキーの面目躍如……？

木村多江の熱演に注目！

リリー・フランキーも木村多江も映画初主演。もっとも木村多江は『花とアリス』（04年）、『笑の大学』（04年）、『電車男』（05年）、『大奥』（06年）、『怪談』（07年）に出演しているから、私も何度も観ている女優。しかし、彼女の役柄は主役ではないため、その名前はインプットされていても、女優としてあまり強い印象が残っていなかったのは仕方のないところ。

この映画で、うつ状態になってしまって仕事を辞め、心療内科に通院せざるをえなくなるのが翔子だが、それは一体なぜ……？ 女の幸せは結婚する男の出来によって大きく左右されるのは当然だが、翔子の母波子（倍賞美津子）や兄の勝利（寺島進）とその嫁雅子（安藤玉恵）の目には、職を転々とする頼りなさそうな男カナオが、翔子の夫としてふさわしくないと考えていたことは明らか。しかも、結婚式も挙げないまま翔子は妊娠してしまったから、母親や兄夫婦の心配はなおさらだ。そんな家族か

らの冷たい視線の中、翔子は健気にも「お、動いた！」と少しずつ大きくなっていくお腹に手を当て、カナオとの幸せを感じとっていたが……。

裁判員制度の開始は、来年5月21日に！

08年4月8日付夕刊各紙は、法務省が裁判員制度の開始を来年5月21日とする政令案をまとめたことを一斉に報じた。そんな状況下、裁判員制度の実施に向けて、大阪弁護士会館内には全国の弁護士会ではじめての模擬法廷が完成し、3月26日には「こけら落とし」の模擬裁判が開かれた。また、近畿弁護士会連合会（近弁連）も5月に近畿一円の弁護士を集めて研修を開くなど、裁判員制度下でのあるべき刑事弁護を実践できる弁護士の育成におおわらわだが、私は大いに憂慮中……。

法廷画家とは……？ その実態は……？

このように、刑事裁判についての日本国のシステムが大きく変化している現状下で、この映画が多分日本映画ではじめて紹介する法廷画家という職業は実に興味深い。こんな職業が成り立つのは、被告人の人権尊重のため法廷での写真撮影が自由にできないためだが、法廷画家がこんな風に仕事していたことは、弁護士生活35年を迎える私でも知らなかったもの。

カナオにそんな仕事を紹介したのは先輩の夏目（木村祐一）だが、某社の法廷画家として就職したカナオが東京地裁の司法記者クラブ室にいくと、先輩の法廷画家である吉住栄一（寺田農）や橋本浩二（斎藤洋介）が。さらにそこには調子と要領のいいだけの記者（？）諸井康文（八嶋智人）も。ここで面白いのは、彼らがメチャ個性的なこと……？

大阪地裁の司法記者クラブの実態は私もよく知っており、そこにも個性的な記者がたくさんいたが、残念ながら最近はそれも次第に画一化……？

女にとって子供とは……？

序盤に登場した、ちょっとケツタイではあっても仲睦まじく幸せそうだったカナオ、翔子夫婦の姿は1993年7月の話。ところが、1994年2月と字幕が表示された時期には、夫婦の寝室の隅には位牌と餉玉が。これは、せっかく生まれてきた子供を失ったため。

もしそうであっても、翔子はまだ若いのだから、体調を整えながら翔子のリードのもとに「×印」をタイムリーにセットしていけば、今後いくらでも妊娠は可能なはず……？ ところが、この時既にカレンダーには「×印」が記されなくなっていたから、翔子の精神状態と肉体状態はかなり深刻……？

そんな時、引越しは気分転換に絶好。また、翔子の兄勝利はちょっと怪しげな不動産屋(?)を営んでいたから、部屋探しなどはチョロイもの。ところが引越しの当日、友人と鍋を囲みながらカナオが猥談に花を咲かせているとき、突然「蜘蛛！」という悲鳴を聞き、その混乱の中で「蜘蛛を殺さないで！」と絶叫する翔子の姿を観ていると、翔子は誰がどうみても少しヘン。

男にはわからないが、やはり女にとって、子供を亡くした悲しみが心身に与える影響は想像以上のものが……？

遂にダウン！ それを支えたのは……？

私は「うつ」になったことがないから全くわからないが、いったんそんな症状が出はじめると、よほどタイムリーかつ適切に何らかの治療を施さなければ容易に改善しないはず。その後の翔子の行動をみていると、そう思わざるをえない。

翔子がダウンしたのは1995年7月頃。あの地下鉄サリン事件が世間を騒がせている頃だ。翔子はその頃1人産婦人科の門をくぐり、中絶手術を受けていたが、それは一体なぜ……？ そんな弱った精神と弱った身体のまま無理をして、ある作家のサイン会に立ち会っていた翔子は遂にダウン！ そして、97年10月には仕事も辞め、心療内科に通院する状態となっていたが、それを支えたのは一体ダレ……？

90年代のあの事件、この事件を！

プレスシートには「現役の法廷画家に聞く『法廷画家のお仕事』」という解説があり、興味深い。法廷画家には法廷傍聴を優先してできるという特権があるわけではないから、傍聴が抽選となるような社会的反響を呼んだ大事件の法廷の傍聴席に入るのは大変らしい。しかし、1993年に先輩から勧められて法廷画家の仲間入りをしたカナオは、1988年から89年にかけての連続幼女誘拐殺人事件、1995年3月20日のオウム地下鉄サリン事件、1999年11月22日の音羽幼女殺害事件、2001年6月8日の池田小児童殺傷事件などの重大事件の法廷のサマとそこで裁かれる被告人の姿を描いてき



©2008『ぐるりのこと。』プロデューサーズ

たから、そこでのリアルな人間ドラマと否応なく明示される人間の本質をイヤというほど実感してきた。それによってカナオは大きく人間的に成長したようだし、私たちもあらためて90年代のあの事件、この事件を思い出しながら人間の本質についてのお勉強を……。

この映画に登場する連続少女誘拐殺人事件の宮崎勤や池田小児童殺傷事件の宅間守らの凶悪犯＝被告人は、もちろんそれぞれ現役の俳優が演じているが、私のアイデアとしては、その部分だけはドキュメンタリータッチにすれば面白かったのでは……？ もっとも、ニュース報道をそのまま映画の中にもってくるにはさまざまな制約があるのかもしれないが、それはきっとクリアできるはず……。

後半にみる翔子の再生は……？

映画後半は、どん底状態の翔子が少しずつ再生していく姿が描かれていく。もちろんこれが橋口監督がこの映画で描こうとしたテーマだが、壊れそうになったしっかり者の翔子を、女にだらしく仕事にも頼りないリリー・フランキー扮するカナオが立派に支えていくところが面白い。観客の心には、そんな橋口監督の視線の温かみがひしひしと伝わってくるはずだ。

再生へのきっかけとなったのは、1997年10月の台風のある日の出来事。家の中で

「わたし、子供ダメにした……」と取り乱す翔子とそれをやさしく受けとめるカナオとのシーンを観ていると、「カナオ君もなかなかやるじゃん！」と彼の値打ちを再認識！ 次に再生の原動力となったのは、茶会に通うようになった翔子が1998年7月、庵主様から提案された本堂の天井画のリフォームを引き受けたこと。やり甲斐のある仕事をもつことが人間の再生に大きく役立つことをあらためて痛感！

ところで、翔子が再生できたか否かを計る佐藤家特有のメルクマールは、寝室にあるカレンダー。つまり、そこに「×印」が記されているかどうかだが、再び「×印」が記されたのはいつ……？ 日々流れていく日常生活の中で、そんな2人の貴重な時間が共有できたということは……？

人、人、人……

映画の終結に向けてはいいことだらけ。その第1は、翔子の父親がガンになったと判明したことから生まれるある物語。ここでは、翔子の実家をめぐる人間模様が明らかになると共に、カナオの人間性の良さが承認され、はじめて母親の波子が翔子とカナオとの結婚を祝福してくれることに。母親の口から「翔子をよろしくお願いします」との言葉を聞いたとき、カナオはもちろん翔子の胸にもこみあげるものがあったはず。

第2は、これはよくある話だが、他人の結婚式の風景に出くわしたカナオが、翔子に対して「お前もあんなのやりたいか？」と質問したことから生まれたある記念写真。橋口監督がこの映画で描きたいのは人間の温かさだということが、実によくわかる。

この映画の最後のセリフは、死刑判決を受けた池田小児童殺傷事件の宅間守被告が、傍聴席の被害者遺族に対して罵詈雑言を浴びせ、退場させられる姿を見たカナオが、裁判所の渡り廊下で「人、人、人……」と呟くもの。これは法廷画家を約8年間続けてきたカナオの大きな成長を裏づけるものだが、この映画を観た私たちも、しっかりとその言葉の重みを受けとめなければ……。

2008(平成20)年4月12日記